
大切

佐藤 千明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大切

【Nコード】

N2508C

【作者名】

佐藤 千明

【あらすじ】

もうオレは結婚してるのになんでこんな奴が気になるんだろう？
素直で純粋な子供みたいな奴なのに…。オレはこいつになにが出来るのか？分からない。苦しいよ。お前に逢いたい…。

く 忘れたくない君

私の事無理して理解しなくていいんだよ

頭痛いなあ。なんかこの言葉を思い出すと目頭の所がキーンとしてくる。

「どうしたの？怖い顔して。」
嫁が話しかける。

「ん？ちよつとアツキの考えててな。」

「アツキ？ああ！あなたが最近ダイビングで担当したコね。不思議なコんでしょ？」

「ああかなり不思議だよ。」

不思議つというよりもあいつはバカだ。本当にバカだし、バカみたいに明るいし、バカみたいに素直だし…。でもあいつはオレには到底理解出来ない暗闇で生きている。でも理解はしたい。あいつを救ってやりたい。俺の手で…。

「ねえ今晚なにしようか？」

「ん〜じゃカレー。」

「カレー？」

嫁は嫌そうな顔をした。

「カレーいっぱい作りすぎちゃうからなあ。」

「いいじゃん。美味しい！」

嫁は考えてひらめいたみたいで笑顔で

「アツキも呼ぼうよ。私逢いたいし、それならカレー作るよ。」

「アツキに逢いたいのか？」

嫁は笑顔で頷いた。

まあいいかあもしかしたらアツキを少しでも理解出来るかもしれないし…。

「分かったアツキを呼ぼうか。」

アツキをメシに誘ったら嬉しそうな声で

「行く！」と即答した。アツキらしいなあ。

「ねえもうそろそろ着くんじゃない？アツキ。」

「そうだな。じゃ迎えに行ってくるよ。アツキバカだから道に迷うし。」

「あまりバカつて言わないの。いつてらっしやい」

本当に迷ってたら受けるけどな。ちよつと期待してしまう。

「あつお兄ちゃん！」

アツキが近づいてきた。

「お兄ちゃん迎えに来てくれたの？」

「ああお前バカだから迷うと思つてな」

「迷うわけないでしょ！駅から一本道なんだから」

アツキは怒っていたけど楽しそうにしていた。

「お兄ちゃん今日はなんで呼んでくれたの？」

「嫁がお前に逢いたがつっていたからな」

「ふーん。お兄ちゃんのお嫁さんに私も逢いたい！美人さんなんですよー」

「多分、美人かな」

「多分つてなんだよ！」

「美人だよ」

「ふーん」

実年齢よりも幼く見える笑顔でオレを見つめる。この笑顔の裏に闇が有ると思えない…。

父親の顔は覚えてない。私には母親しかいないのに、いつも殴られて、蹴られて…。「あんたなんてどっか行ってしまえ！」これが母親の口癖だった。もう家に居場所が無かった。だから学校に居場所求めたのに同級生にはずっと無視されつづけて、そんな中でも先生は私を助けてくれなくて…。私はずっとこのまま独りである

んだって思ってた。

「お兄ちゃん！私この前講習じゃない海に行ったでしょ？その時すごいキレイな青色の魚見なんだ！」

「空色スズメダイだな」

「それ！」

楽しそうなアツキの顔ずっと見ていたいよ。家に戻ると嫁が晩御飯の用意をしていた。

「お帰りなさいもうすぐで食べれるからね。」

「はい。今日は呼んでくれてありがとうございます！」

「いいのよアツキちゃんに逢いたかったし。」

アツキは嫁の顔をずっと見ていた。

「どうした？」

「ん？お兄ちゃんにはもつたいたくないくらい美人さんだあって思って」

「お前一言多いわ！」

「本当の事だし！もつたいたくない」

この会話を聞いて妻が笑う。

「本当に兄弟みたいね。なんかほのぼのするわ」

兄弟…。本当に兄弟だったらもつとこいつを早くたすけてやれたのに…。あいつよりも

どこにも居場所が無いからずっと独りでいた。でもそんな時に、声を掛けてくれたのがヒデ兄だったんだ。ヒデ兄は居場所の無い私に居場所を作ってくれた。そしてヒデ兄もずっと一緒にいてくれた。そしてヒデ兄にタバコもお酒も教わった。すごい楽しかった。そしていつの間にかヒデ兄のこと好きになってた。そしてヒデ兄もそれに答えてくれた。凄い幸せだった。そんな中で私ヒデ兄の子供を妊娠した。もうその時はうれしかった。普通の家族が出来るんだって…。でもヒデ兄は嬉しそうな顔をしてなかった。ヒデ兄は「下ろしてくれ…」って呟いた。私頭が真っ白になっちゃった。「俺は中学生を妊娠させたつという世間の目にはたいきれない…。」だって。もう誰に信じられなくなっちゃった。

誰も信じられなくなっちゃったかあ。オレのこと信じてないんかな？

「ああお腹いっぱい！もう食べれないよ」

「お前食い過ぎだろ？もす少し遠慮しろよ。」

「やだ。美味しいんだからいっぱい食べたいでしょ？」

「ありがとう。」

「美味しかったです！あのトイレ借りていいですか？」

「いいよ。そこ出て右に曲がって突き当たりね」

「はい。」

数秒の沈黙のあと妻が呟いた。

「あの子楽しそうにしてるけど、どこか寂しそう…。」

「寂しそう？」

「うん。すごい明るくてニコニコしてるけどそれが誰かに寂しいよって言ってるみたいを感じる」

嫁の感は誰よりも優れてる。アツキの心も分かるのかもしれないな。

「オレもその才能欲しいよ…。」

「ん？なにか言った？」

「いや別に…。」

つい口に出てしまった。でも本当に妻の才能が少しでもあればアツキの苦しみ分かるのに。

「お兄ちゃん！私もうそろそろ帰らなきゃ！」

時計は21時を指していた。

「まだ早いだろう？」

「明日バイト早いし、それに長くいたら夫婦の邪魔しちゃうし」

「お前が気を使うなんて珍しい」

「珍しくないよ！当たり前前、当たり前」

「そうか…。」

「あなた駅まで送って行ったら！ついでにビデオ返してきて」

「ああ分かった」オレの後ろをまるでひよこの後ろように付いてくるアツキはまるで本当の妹みたいだ。

「今日はありがとー！すごく楽しかった。お兄ちゃんのお嫁さんにも逢えたしね。今日は文句ない1日だった」

「そうかお前の笑顔を見るとオレも笑顔になるよ」
アツキはニツと笑った。

笑顔の中に寂しさがあるか…。あるんだったらオレにもその寂しさ分けてくれよ…。

「お、お兄ちゃん？苦しいよ…。」
気が付いたらアツキを抱きしめていた。

アツキを抱きしめた日からオレの心臓が早く動く。まるで初めて女の子を抱き締めた中学生みたいな感覚だ。オレはもう三十路になるっていうのに。それにオレには嫁がいる。アツキには恋愛感情つてもものは無い…。アツキは妹みたいな感じなだけでそれは特別では無いよ。

「セブンスター？あなたタバコ変えたの？」
嫁が不思議そうな顔をする。

「ああアツキが吸ってて貰ったらこれが病み付きになってな」
「ふーん…」

嫁は改まった顔で話し始めた。

「あなた最近アツキの事ばかりね？いつも聞けばアツキの名前出して…。そんなにアツキのこと心配？」

「なんだよ？急に？」

「私はただあなたの心がいつもアツキに向いてるから言ってるだけ…。」

嫁は今まで見たことが無い位な真剣な顔をしていた。

「…アツキにはオレしか頼る奴居ないんだよ。オレはアツキの為に何でもするよ。」

嫁の目には涙が溢れていた。そんな嫁にオレは何も言えないくらいアツキのに対する気持ちが溢れ出す。オレは嫁を置いて飛び出した。そのままアツキのもとへと向かった。

こんな人生本当にあるんかよ？って思うでしょ？私もなんか

物語を話してるみたい。他人ごとみたいなんだあ。でも今でも昔の事で苦しめられる。凄く苦しいよ…。こんな私の事誰かに分かってもらいたいよ。でも無理して分かってもらわなくていいよ。だってみんな他人だもん。…

「どうしたの？急に呼び出して！」あつきと逢った瞬間アツキを抱き締めた

「アツキ…オレ、お前の事もっと分かりたいよ…オレお前と一緒にいたいよ」

「…ありがとう。でもお兄ちゃんが一緒にいなきゃいけないのは私じゃないよ」

アツキはオレの胸から離れた…。

「お兄ちゃんはいつも私を気にしてくれて、いつも心配してくれる。そんなお兄ちゃんが私大好きだよ。でも、私はお兄ちゃんに心配されるとすごく不安になっちゃうよ…このままだとお兄ちゃんを信用してしまふ…。でも信用した瞬間にお兄ちゃんがいなくなったらどうしようって…」

「オレはアツキの前から絶対消えないよ。アツキの為ならなんでもする…」

アツキは冷たい目をして話し始めた

「じゃなんで私に逢いに来たの？私は悲しい思いをしてる人を見たくないんだよ！」

「悲しい思いをしてる人は…」

「いるでしょ？奥さんは？お兄ちゃんがここで私と逢う事すごい悲しんでるよ」

「なにお前いい子ちゃんしてるんだよ…。」

「…いい子ちゃん？」

いきなりアツキは冷たい口調になった。

「いきなりいい子ちゃんなんて言うなよ…今までだっけと前前でもいい子ちゃんしてただんだからさあ〜」

今までのアツキの口調とは全く違う

「純粹で素直で子供みたいな笑顔をするってけっこうだるいんだよ……」

「アツキ……。」

「悪いけど私用事あるからもう行くよ」

アツキはオレの前から消えた。

あれから幾度の季節が流れただろう。オレは嫁との間に子供が出来た。産まれたのが秋だから亜紀奈つと付けた。だけどこれは建て前にすきなかつた。本当は佐藤亜紀奈の名前をそのまま付けた。そうアツキの本名を……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2508c/>

大切

2011年1月16日01時38分発行